捨てられぬ１枚の写真 ～喉の小骨が取れた

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

小生もそろそろ後期高齢者の仲間入りで、趣味のタケノコ採り・山登りもできなくなり、女房もそれほど健康ではありません。また３つの癌、大病を患って元気なうちに終活しようと、気になっていたものが職場や趣味の仲間たちと撮った写真プリントです。今はスマホの時代ですが、昭和人間の私の時代は写真プリントです。そのまま処分するのも惜しく、数10人以上の旧友や元職場の人たち、趣味の登山や釣り仲間などに送ると、皆から感謝のお便りをいただきました。そして皆に送り終った後、さて家族の写真を整理していたら、どうしても捨てられない１枚の写真が出てきました。物心を覚えた時よりお世話になり28年前に亡くなった叔父さんの写真です。その娘さん、私の従妹の結婚式で、何よりもお酒大好き人間だった叔父ちゃんの満面の笑顔の写真は、そのものを現わしている懐かしい写真です。

娘さんは室蘭で結婚して転勤で大分に行き、夫の定年後に夫の実家、歌の抜群に上手で心に響いて伝わってくる大ファンの歌手細川たかし氏の出身地の真狩村に移り住んでいるとの記憶があったものですから、ネットなどで当てずっぽうに調べて写真を送る前に実際に届くかテストを兼ねて真狩村の字（あざ）までの住所を書いて、ハガキに事情を説明して投函しました。お久しぶりですと書き出したものの約50年、半世紀以上も会っていません。ハガキは送り返されなかったことから届いていると思いました。

今年は昭和100年ですが、昭和30年代、叔父ちゃん夫婦の新婚の時、木造の我が社宅の長屋に間借りしていました。長屋の間取りは奥の押し入れのある６畳間（いわば寝室）と便所の入り口、ストーブのある６畳間の２間でした。なお便所をトイレと呼ぶことを後になって知りました。

叔父ちゃん夫婦はそのストーブのある居間の半分にベッドを入れ、カーテンで仕切っていて間借りしていたのです。お袋も弟夫婦だし「そうかい、そうかい」と言って了承していました。５、６歳だった小生は叔父ちゃん夫婦が「いつも見つめ合っている」ことが不思議でならなく、いつも見つめ合っているとよく口走っていたので、生意気な小僧と閉口していたことでしょう。後になって父親の甥っ子も同じように間借りしていました。これは昨今では到底考えられませんが、どうして６畳の居間の半分に間借りができたのだろうかと考えると、それはみんな生きるためであり、当時は親戚の持ちつ持たれつの結束が、ファミリーを中心とした絆が強かったのだと思います。何せ戦争が終わって10年余りの時代です。何かと気せわしい世の中と感じている爺さんですが、当時のゆっくりとした時代の流れが懐かしいです。

振り返って思い出してみると、物心ついたころ電燈は裸電球でしたが（田舎の親戚の家ではランプでした）、水道・ガスはなく水は天秤棒で汲みに行って水瓶（みずかめ）に入れていました。冬はよく水瓶に氷が張っていたものです。幼いころ父のタバコを悪戯で吸ったところ辛くて辛くて水瓶に走り頭を突っ込んでうがいをしたことがあります。子供心にも悪いことをしたと思い、父を見たら笑っていました。いい思い出です。職工長屋はどこも収入はみな同じで、隣は子供４人もいました。

２歳の時に弟が生まれた時、立ち会っていたところを覚えています。1954年９月の洞爺丸台風では多くの人が亡くなったと父母が沈痛な思いで話していました。1959年９月の伊勢湾台風の時、父は不在で、とても酷い風でガラスが割れないように、お袋が毛布を木の窓枠に内側から釘を打ちつけていました。子供の目にも不器用でガラスが割れると思ったものです。

中学生になって小生と弟は押入れをベッド代わりに寝ていました。奥の６畳間に勉強机が入りカーテンで仕切られていましたが、夜中に便所に行くにしても親父とお袋の寝顔を跨いで行ったものです。ある夜中に豆電球の明かりの下でトイレのために居間に出たところ、天井から大きなクモが目の前に垂れ下がっており、腰を抜かしてしまったことがあります。勿論クモも慌てて糸を手繰り寄せスルスルと天井に上がっていき、本当にゾッとしたものです。

叔父ちゃんは娘３人をもうけました。奥さんが39歳の時に脳溢血で半身不随になり仕事と子育てに苦労したのですが、弱音を吐くことはありませんでした。奥さんに先立たれた後亡くなったのですが、そばに酒瓶が転がっていたと聞いて、叔父ちゃんらしい亡くなり方、本望だったと思いました。小生と女房が結婚して初めて室蘭のお袋宅に行った時に、叔父ちゃんが車で東室蘭駅までニコニコ顔で迎えに来てくれた心遣いが嬉しかったなぁ。

たった１枚の写真がタイムスリップして物心のついた約70年前頃より中学時代まで、忘れていた当時の風景・日常などを走馬灯のように蘇らせてくれ凄い力があると思ったものです。そんなんで捨てたらバチ当たりものです。

後日、真狩村にいる従妹の住所を確認して、写真を送った次第です。まずは何よりで喉の小骨が取れたように心の引っ掛かりが解消しこれで小生も成仏できます。